

不登校経験の捉え直しにおける高校教育の影響
ー通信制単位制課程を卒業した当事者の語りからー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
小澤 容子

文部科学省の調査によると、小学校、中学校、高校における不登校の児童生徒数は、全国に約 17 万 5 千人であり、毎年微増減をくり返しなが、依然として高い水準を維持している。全国において適応指導教室やフリースクール等、様々な不登校支援が行われているが、義務教育終了後の高校生や青年への支援が十分であるとはいえず、当事者によって語られる不登校経験の内容、内的変化に着目した研究は十分ではない。中でも、単位制通信制高等学校での不登校支援教育の影響を検討した質的な研究は多くないといえる。

そこで本研究は、かつて不登校を経験した生徒が多く通う私立 X 高校通信制単位制と Y 高校通信制単位制の卒業生 9 名を対象に、半構造化面接によるインタビュー調査を行い、当事者の不登校経験時と現在までの内的変化を、主に通信制単位制高校での学校生活に着目して探してみる。特に通信制単位制高校在籍時において、どのような内的変化が起き、どのようなプロセスを経て自己変容するのかを明らかにし、その変化に影響をもたらす要因や、その変化における高校教育の影響について考察することを目的とする。

インタビューから得られた不登校経験者の語りをデータとして、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) により分析した結果、不登校経験時から現在までの自己変容は 15 のカテゴリーから捉えられていることが明らかになった。「過去(1)不登校時期」「過去(2)単位制通信制高校在籍時」「現在・未来」という 3 つの時間軸で位置づけると、その自己変容のプロセスから、通信制単位制高校では『①自分と向き合い自分を見つめ直したこと』『②対人関係が豊かになり活動的になったこと』、それを経て今『③成長した自分がいること』『④不登校経験への意味づけが変化したこと』が明らかになった。

①と②の自己変容に影響をもたらした要因として、友達や仲間との関わり、教師の支え、通信制単位制高校の制度やシステムの特徴の 3 つの要因が確認された。③と④は、①と②に付随する形で見られる自己変容であると考えられる。不登校経験はそれを脱した後も続いており、就職活動の中で直面化した者もいるが、一方で、不登校経験を目標の中に取り入れて将来の展望を持つ者、今後なんらかの形で不登校経験を生かしていきたいという意気込みを持ち模索する者が多く見られ、不登校経験をポジティブに捉えることで、不登校経験を人生の一部として積極的で肯定的な意味づけをしている姿が確認された。このことから、不登校経験を、今の自分につながりを持たせ、今後の展望や将来の目標の中に組み込んで活用していくことによって、これまでの不登校経験に人生という文脈の中で意味をもたせることができるという可能性が示唆された。